

△(30)▽

この連載を故人になったばかりの方の思い出ばなしとしてめぐらねばならないのはつらいけれど、どうしても忘れられない人、それが殿山泰司さんだ。

「はじめじめしないで、パツとやっつけてくれや」。そう言っ

だった。だから「そ、初めてお会いした時も、いくらなじめのお顔であったにしても、ずつと以前からの知り合いみたいな気分ですぐにお話できんだと思う。」

好み一致し意気投合

あれは増上寺の富樫雅彦のコンサートだったよな気がするが、すぐ並びの殿山さん

を同行の清水俊彦さんから紹介されたとき、真っ先に浮かんだのが「あれ? どうしてこんな所に」という疑問だった。そこで流れていたのが前衛の色濃い「フリージャズ」と呼ばれている音楽だったからだ。だがお話ししてみても殿山さんの好むジャンルとひどく共通しているのに驚いた。

持ったのは文藝春秋の「漫画読本」とか「小説新潮」などに毎月の特設エッセーで、その心地よいテンポに乗った流れるようなリズムの文章にすっかりほれ込んでしまった。

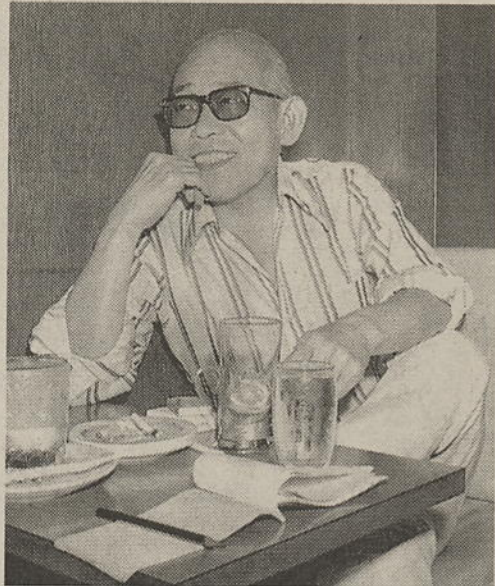
それは題材を「紅燈の巷(ちまた)」に求めた放浪記であつたけれど、自由奔放、天衣無縫といった月並みな形容を無難に超えた天才的な筆致

あこがれのジャズ人生 胸に生き続ける殿山氏

吉沢元治、沖至といった連中だった」とファンによって守られていた「フリージャズ」の大切な拠点だったのだ。殿山流に言つと「トリオ対トリオ」、つまりミュージシャン

名古屋で遭遇し連行

その殿山さんと、名古屋でばったりお会いしたことがあ



ジャズを愛した殿山泰司さん

したが、それは例外なしにコンサートのお場だった。もうそのころ、お酒を口にされなくなっていたから、もっぱらジャズのお話をするだけだったけれど。

「&ジャズ日記」より) ジーンズ似合ミツ遺影 六月二十七日、「殿山泰司さんを偲ぶ会」に出席のため上京した。同行したのは例に

る。僕などではとても書けないその生々した描写をちよつとお借りしてしまおう。

「三百間ばかり名古屋にいたよ。暑いので定評のある名古屋シティも奇妙に涼しかった。ある夜、リハーサル

が一年長かなあとしか見えなかつたジーンズの似合殿山さんの遺影に向かって「あなたのすばらしいジャズ人生はあこがれの境地です。いつまでも僕らの胸に生き続けてともに歩いて下さい」僕はそう心に

おわり